

2024年12月8日 アドベント第二週朝拝

「キリストを待ち望む」
マタイ2章1-12節

鄭 ヒムチャン

賛美 讚美歌 94

主の祈り

コイノニア訪韓報告

賛美 「キリストこそ平和」

説教 マタイによる福音書2章1-12節 「キリストを待ち望む」

2:1 イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。

2:2「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」

2:3 これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった。

2:4 王は民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。

2:5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。

2:6『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』

2:7 そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞いた。

2:8 そして、「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って、彼らをベツレヘムに送り出した。

2:9 博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。

2:10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。

2:11 それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

2:12 彼らは夢で、ヘロデのところへ戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国に帰って行った。

本日のみことばには救い主イエス様がお生まれになった時、その誕生を知った人々がどのような反応をもってイエス様を迎えたのかということが記されています。このアドベントのとき、私たちもこのみことばから人類の救い主であるイエス様をどのように迎えていくのか、そのことについてともに考えていきましょう。

主の使いの知らせ通り、エルサレム、ユダヤの地ベツレヘムでイエス様はお生まれになりました。このイエス様がお生まれになった際、とても不思議なことが起こりました。ユダヤ人の王の誕生を星によって知った博士たちが東の国からエルサレムにやってきたのです。

ここで博士と訳されているのはマゴスという言葉です。このマゴスとは天文学と占星術に従事していたペルシャの司祭階級のメンバーを指します。博士たちが来たという東の方とは、ペルシャを指す言葉とも考えられます。しかし、後にこの言葉が必ずしもペルシャの占星術師だけを意味するわけではなく、バビロニアや他の場所の占星術師もマゴスと呼ばれていました。ですから、この東の方が正確にどの地域を指しているのかは特定できません。しかし、マタイの福音書が私たちに語ろうとしていることは、ユダヤ人ではない異邦人がイエス・キリストを礼拝しに来たということでしょう。

この東の方の博士たちはエルサレムにやって来て、ユダヤ人の王として生まれたお方がどこにいるのかと尋ねました。しかし、エルサレムにおいてこの博士たちの訪れは喜ばしいものではありませんでした。3節では「これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった。」と記されています。その当時ユダヤの王座についていたヘロデを動揺させたのでした。ヘロデ王はユダヤ出身の王ではなく、イドマヤ(エドム)の出身でした。彼はユダヤの王家であったハスモン家から妃を迎えて王として即位したものの、イドマヤ出身であるが故に、王としての正統性が常に疑われていました。そんな中、東の方から来た博士たちの「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。」という言葉聞いたのです。これを聞いて動揺したヘロデは民の祭司長たち、律法学者たちをみな集めてどこで生まれるのかと問いただします。4節を見ますとヘロデは「キリストがどこで生まれるのかと問いただした」とあります。彼は博士たちの話を聞き、この知らせはキリストの誕生であるということを知ったのです。しかし、後の箇所2章13節にある主の使いのことばから明らかになっているように、ヘロデは自分の王位を脅かす存在となるこのキリストを探し出して殺そうとしていたのでした。

本日のみことばを読み進めると大きな違和感を覚えます。それはユダヤの人の王の生まれの知らせがユダヤの内側からではなく、外部から、異邦人たちの訪れとともにもたらされたということです。東の方の博士たちは、星を見て、何か大きなことが起こっていることを感知したのに対し、いざ当のユダヤの地は、救い主のお生まれに全くの無関心の姿を現しています。東の国においてはその威光が確かに輝いていたのにも関わらず、当のユダヤの地においては誰もそれを見ることができなかったのです。

東方の博士たちがユダヤの地にやって来て尋ねた場所はエルサレムでした。ユダヤ人の王が生まれたなら、それはまさに王宮がある都である可能性が一番高いからでしょう。ですがよく考えてみますと博士たちにユダヤ人の王の生まれを知らせ、彼らを導いた星、これは神様が彼らに示された星ではありますが、この星

が示す事柄には少し曖昧な面があります。何故なら博士たちはユダヤ人の王の生まれた場所がはっきりとは分からず、エルサレムに来てその場所を尋ねているからです。対してユダヤの地においてはどうだったでしょうか。ヘロデ王の命令を受けた祭司長、律法学者らは預言のことばを探しました。そして預言者ミカの預言からその場所がベツレヘムであることをはっきりと見出したのです。しかし、それが明らかになってもなおエルサレムには喜びはありませんでした。彼らには神様から与えられたみことばがありました。そしてこのみことばは星よりもはっきりと、さらにはずっとはるか以前から救い主の誕生を知らせ続けていたのでした。しかし、ユダヤの地にはみことばの知識はありましたが、それを受け入れそのみことばが成就することを待ち望む姿はありませんでした。それどころか 7,8 節を見ますと、ヘロデは博士たちからキリスト誕生に関する情報を引き出し、私もあなたたちと同じように礼拝したいと嘘で取り入って、彼らをスパイとして上手く使って、キリストを消し去ろうと策略を立てていることが分かります。ヘロデにとってはそれが最も賢い対処に思えたのでしょう。しかし、神様の前においてそれはまったくの無力なものでした。12 節にあるように神様は夢を通してむしろヘロデの策略を無きものとなさいました。

対してベツレヘムに向かっていく博士たちの歩みは神様のみこころにかなっていませんでした。神様は星を通して彼らをイエス様のみもとにまで導かれました。10 節を見ますと「その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。」とあります。これは原語を見ると「大きな喜びをもって大いに喜んだ」というような重複の表現で記されており、言葉にできない最上の歓喜に包まれている様子を物語っています。彼らにとってイエス様に出会ったことはそれほど嬉しいことだったのです。実に彼らが東の方からこの場所に至るまでは 1 日 2 日の旅路などではなく、並々ならぬ犠牲と努力が必要だったはずで、そして彼らはその最上の喜びをもって、ユダヤ人の王の前に、それは幼子であったわけですが、ひれ伏し、礼拝しました。そして宝の箱をあけて黄金、乳香、没薬をささげました。

イザヤ書 60:1-6 を見ますとこのような預言があります。

60:1 「起きよ。輝け。まことに、あなたの光が来る。主の栄光があなたの上に輝く。

60:2 見よ、闇が地をおおっている。暗黒が諸国の民を。しかし、あなたの上には主が輝き、主の栄光があなたの上に現れる。

60:3 国々はあなたの光のうちを歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。

60:4 目を上げて、あたりを見渡せ。彼らはみな集まって、あなたのもとに来る。

あなたの息子たちは遠くから来る。娘たちは脇に抱かれながら。

60:5 そのとき、あなたはこれを見て晴れやかになり、心は震えて、喜ぶ。

それは、海の富があなたのところに移され、国々の財宝もあなたのもとに来るからだ。

60:6 らくだの大群が、メディアンとエファの若いらくだが、あなたのところをおおい尽くす。これらシエバから来るものはみな、金と乳香を携えて、主の誉れを宣べ伝える。

これは終わりの時、主の都にあらゆる部族の者たちが最上の献げものを携えて神を礼拝するためにやってくることを預言していることばであると考えられます。博士たちの礼拝はこのイザヤ書の預言に比べれ

ば、とても静かで素朴な礼拝でした。しかし、この博士たちの礼拝はこの預言の成就の幕開けを物語っています。終わりの日イエス様が再びこの地に来られる時、すべての民族と異邦の国々が主の前にひれ伏し、礼拝し、宝をささげることでしょう。東方博士の訪問は、まさにそのような日が始まったことを私たちに知らせているのです。

今日はマタイ2章の前半のみことばから、イエス様がユダヤの地でお生まれになった時、その生まれを知った人々がどのような反応をもってイエス様を迎えたのかということについて見てきました。そしてここには大きく2つの相反する姿がありました。ユダヤ人の王の誕生を知り、礼拝しにやってきた東の博士たち。対して約束された王の誕生についてまったく知る由もなく、むしろそれを知らされた時、動揺していたヘロデをはじめとするユダヤの姿です。救い主の誕生を迎えるこの両者の反応は、今を生きている私たちと決して無縁ではないと思うのです。何故なら、今日においても私たちに対して同様にイエス様は全人類の王であるということが示されているからです。博士たちをユダヤ人の王へと導いた星のように私たちにもまことの王がおられることが示されています。もちろん星を通してではありません。いや、むしろ星のように曖昧なものなどではなく、はっきりとわかる言葉をもって記されているみことばが私たちには与えられているのです。

そしてこのみことばは同時に、終わりの時、主イエス様は全世界を統べ治める王として再び来られることを私たちに明らかにしています。イエス様が再び来られる日、私たちは博士たちのようにこの上もなく喜ぶのでしょうか。そしてその日を心から待ち望み、備える者となるのでしょうか。それともヘロデのようにまことの王の到来の知らせに動揺し、自分の王権を守るためにもがき対抗するのでしょうか。

説教を終えるにあたって、もう一度本日の冒頭箇所、2章1節のみことばに戻しましょう。「イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。」

イエス様がお生まれになった時、それはヘロデ王の時代でありました。しかしイエス様がお生まれ時、それは同時に博士たちがイエス様を礼拝するためにやってきた時だったのです。この過去に起きたみことばから私たちは学び、来るべき将来に備えたいと願います。イエス様が再びこの地上に来られる時、それは私が王の時代であるのでしょうか。それともイエス様が再びこの地上に来られる時、私はキリストを礼拝するために主の都に上るものなのでしょうか。

自分が王となって生きること、それは自己中心に生きていると言い換えられるでしょう。しかし、この自己中心の生き方を変えること、いやそもそもそのように自分が生きているということに気づくことさえ難しいということが私たちの正直なところではないのでしょうか。実に、私たちは自らの力でこの自己中心から離れることはできないのです。しかし、希望はあります。これは繰り返し語っていることではありますが、みことばが星

のように今も輝き、私たちに示されているからです。みことばは 私の足のともしび、私の道の光であり、みことばは生きていて、力があり、私たちの心のうちにあるあらゆる思いやはかりごとを見分けることができます。何よりもみことばは私たちに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。

この12月、私たちはあらゆることに忙しくなり奔走しやすい時期であるといえます、しかし働きに勤しみながらも心の目は高くあげていたいものです。なぜなら変わらずみことばの光は星のように輝いており、このみことばが私たちに救い主に導き、私たちに救いへと導こうしているからです。お祈りいたします。

賛美 讃美歌 115

頌栄「2024 テーマソング」

祝 禱

婚約式(第三礼拝後)